

表現のための活動プログラムのデザイン:看護の心を表現すること

Design of Activity Program for Expression :project for expression on caring mind

小早川真衣子*1
Maiko Kobayakawa

須永剛司*2
Takeshi Sunaga

丸山素直*2
Sunao Maruyama

平野友規*1
Tomoki Hirano

山田クリス孝介*4
Kosuke C Yamada

西村拓一*3
Takuichi Nishimura

渡辺健太郎*3
Kentaro Watanabe

藤満幸子*5
Sachiko Fujimitsu

*1 東京藝術大学大学院
Tokyo University of the Arts Graduate School

*2 東京藝術大学
Tokyo University of the Arts

*3 産業技術総合研究所
National Institute of Advanced Industrial
Science and Technology

*4 慶應義塾大学
Keio University

*5 佐賀大学附属病院看護部
Saga University Hospital

I am researching on designing "a new activity for nursing work" at a hospital in collaboration with nurses. In 2012, when this project began, we recognized the problem of design was to redesign the information system terminal in the hospital to such a thing. And now, we have practiced a "workshop to expression on nursing mind" with nurses. In this design project that include research, in order to clarify the formation of that project, we have reflected the design process on "Activity program" and "tools". As a result, we found some characteristics attitude of Co-design.

1. 概要

病院での「看護の仕事の新しいあり方」を看護師たちと共同でデザインすることに取り組んでいる。このプロジェクトがはじまった 2012 年、私たちは院内の情報システム端末を如何に改善するのかということデザインの問題として認識していた。それから 6 年経った今、私たちは看護師と共に「看護を語る場」をつくっている。そのねらいは、看護の心を表現することである。

このプロジェクトにおける共同デザインは、どのように成り立っているのだろうか？本稿では、私たちが出会った予想外で驚きの出来事に注意を向け、生成される状況とどのように関わったのか。また、「看護を語る場」のための「活動プログラム」と「道具」のデザインをどのように志向していったのかを私たちの認識とその変化に焦点を当て、ふり返る。そして、そうした状況と対話しながらデザインしている実態を考察する。

2. 本研究の位置づけ

2.1 着想:活動プログラムのデザイン

これまでに見たことのない新しい非物質の道具が、人に受け入れられない、人の営みに埋め込まれないという問題はしばしば起こりうる。そこで、私たちは非物質の道具と一緒に最初にデザインされる企図としての「活動プログラム」という対象に着眼している[小早川, 2009]。活動プログラムは、「活動」そのものではなく、道具の使用を含む活動を方向づける企図でありシナリオである。実際の活動は人間がさまざまなリソースとの相互作用によって生成するものであるという理解を実践ごとに深めていきながら、それらリソースを組み立てるための活動プログラムがデザインされることが必要と考えている。物質であれ非物質であれ、道具はリソースのひとつであり、生成する活動によって意味づけ

られるものだという着想である。しかし、活動プログラムをデザインする方法は未だ明らかではない。

2.2 探究:どのようにデザインしているのか？

ここで探究している活動プログラムのデザインの「方法」は、デザインした活動プログラムが計画的に正しく実行され完成するためのやり方を意味するものではないことを注意しておかなければならない。なぜならば、実際の活動は、何が起きるかかわからないからだ。例えば、私たちが一種の「ドローイング」として実施する「表現ワークショップ」は一般の人たちが参加する体験型の活動であるが、その日集まる表現者の個性や、そこにどのような反応が起きるかは分からない。さらに、そこで起きたことと同じことは二度とは起こせない。不確実で個別的な状況がそこにある。この観点をふまえ、ふり返る際は、想定外の出来事や私たちが驚いたことに注意を向ける必要があると考える。次章では、実際にそうした特徴をもつ出来事を事例に挙げ、その状況を改めて記述し、解釈していきたい。

3. 共同デザインの実践: MED プロジェクト

3.1 プロジェクトの概要

病院での看護の仕事の新しいあり方をデザインするために、現場の実践者である看護師たちとの協働に取り組んでいる。大病院の看護部の看護部長数名(以下、看護 G)と心理学系の研究者、サービス工学を専門とする研究者、デザイン系の研究者からなる研究グループ(以下、研究 G)が参加しており、学際共同研究「MED プロジェクト」と呼んでいる[藤満 2013, 須永 2013]。このプロジェクトでテーマとなっている看護の仕事の新しいあり方のデザインとは、病院に次々に導入される情報システムの利用によって失われつつある「看護の心」を表現することによって外化し共有する仕組みと文化をつくることである。ここでいう「看護の心」とは、看護師たちが通常業務で患者に対面・対話し

連絡先:小早川(小原)真衣子, 東京藝術大学大学院美術研究科, 東京都台東区上野公園 12-8, koba@asu.aasa.ac.jp

看護処置にあたる際に欠かせない、患者やその家族、そして仲間を想う気持ちである。

このプロジェクトがはじまった 2012 年、研究 G も看護 G も病院内の情報システム端末を如何に改善するのかという課題を認識していた。それから 6 年経った今、研究 G は看護師と共に「看護を語る場」をつくらせている。その場が

3.2 現時点の成果:新聞ワークショップ

「看護を語る場」としてデザインした「新聞ワークショップ」の概要を示す。看護師 20 名程が集まり 90 分間で行う下記 6 つの行為系列(S01～S06)からなる活動プログラム「表現ワークショップ」と道具立てとしての「新聞ワークショップ・キット」をデザインした。当初は研究 G が運営主体となっていたが、2017 年以降、年に数回、看護 G によって自立的に運営がなされている[宮之下 2017]。(写真 1)

- S01 導入:他者の表現を見る
- S02 個人表現 :体験を思い出し作文を書く
- S03 個人表現を味わう:一人ずつ朗読する/傾聴する
- S04 共同表現:グループで新聞をつくる
- S05 共同表現を味わう:発表する
- S06 振り返り:表現体験を振り返る

各行為でどのような体験ができるのか、概要を示す。部屋に入ってきた看護師(表現者)は、まず過去に他者が創作した「新聞」をみる。その意図は、自分がこれから行うことのゴールを知り、これなら「私にもできるかも」と思ってもらうことにある。全員が集まり着席したら、まずは個人で表現する。自分の仕事を振り返り、看護の仕事で「心に残る体験」を思い出し、一人一人が作文する(S02)。「あの出来事は、こんなふう私の心に残っていたんだ」と書きながら気付いていく。次に、それを一人ずつ朗読する。書いた内容を説明するのではなく、書いた作文をただ読み上げる。他の人はそれを傾聴し味わう(S03)。各人が読み終わる毎に拍手する。全員が読み終わったら、次に、4人1グループになり、協働で新聞づくりを行う。各自の作文を貼り合わせ、共通した思いや違いに着目し、対話しながら新聞のタイトルを決めていく(S04)。写真などを用いて装飾しながら、自分たちの表現をさらに味わう。出来上がったら、新聞を見せ合い、タイトルを発表する(S05)。最後に、この表現体験を振り返り、気づきや感想を語る(S06)。なお、S04で創作された新聞は、別のWSでS01の対象となる。

表現者として参加した看護師の一人は「気持ちを出す場がなかったの、皆で気持ちをわけることのできるいいワークショップだった」という感想を述べていた。また、今では主催者側と写



真1. 新聞ワークショップの様子(2017)

なった看護 G の一人は次のように「新聞ワークショップ」に看護の継承という価値を付与している。「看護の心を出すと、見える、読める、残せる。その仕組みとかたちをつくりたい。表現していくと残っていく。自分たちの当たり前を残す試み。」。現在も、活動プログラムと道具が共に細かな改良が続いている。

3.3 ふり振り返り:予想外の出来事

こうした共同デザインの結果にいきつくまでに、私たち研究 G はその場で生成される状況とどのように関わりながら活動プログラムと道具を改善・考案していったのか?私(たち)の認識とその変化に焦点を当てて、その状況を解釈していきたい。次に挙げるのは、この出来事がなかったら、今の共同デザインの状態はなかっただろうと直感する予想外であり驚きのあった特徴的な出来事である。

(1) 事例① S氏の周辺参加と「Zuzie Poetry」

2013年6月27日、私たちは看護Gと一緒にデザインした心象分析ツールと活動プログラム「Zuzie Poetry」を看護師20数名に向けて発表する機会をもった。「Zuzie Poetry」は、看護体験を複数人で対話しながらふり振り返り、可視化して共有することをねらいつつ進められている[渡辺 2015]。発表会では、「活動プログラム」に則った未来のストーリー(以前看護師の一人が表現ワークショップで書いた「ある患者さんとの出来事」という作文が題材)を創作し、実際のツールを使う場面を演じてみせるアクティングアウトの方法を用いることとした。会議室に看護師が集まり、前方に研究Gと看護Gが「Zuzie Poetry」の入ったPCと共に座った。その後、看護Gの内2名が、ストーリー(台詞)が描かれた紙を片手に、PCを操作しながら、「Zuzie Poetry」を使った対話のかたちを演じて見せた(写真2)(図1)。

発表直後、発表を見ていた看護師たちに混ざり座っていたS氏(研究Gでも看護Gでも看護師たちでもない、周道的に参加した人)が、私たちに向かって「今のは出来事を説明するものになっている。大事なそこでの気づきだと思ふ。」と発言した。また、「みなさんがやっておられるのは電子カルテで失われたものを取り戻すためでしょ」と発言。S氏は研究Gに同行してきたにも関わらず、アクティングアウトで現れた活動が、本来実現できなかった表現になっていないという問題点を的確に指摘した。

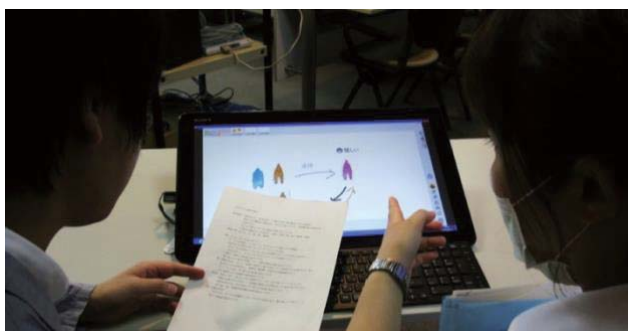


写真2. 「Zuzie Poetry」を使ったアクティングアウト(2013)



図1. 「Zuzie Poetry」のストーリーボード(2013)

解散後、看護師の一人(Tさん)が私に近寄り「思いを伝える機会をつくるのにすごい労力が必要なんです」と言った。

その後、研究 G はツール機能の改善点を抽出しつつもその改良を棚上げし、心象を外化するという活動プログラムを問い直し始めた。同年、9月と11月に「Zuzie Poetry」を使った表現活動

を看護 G に参加してもらいやってみながら、道具と活動プログラムの妥当性を検討した。翌年 2014 年 3 月、今後の進め方を話し合うために病院を訪れ、「Zuzie Poetry」を使った実験ワークショップをふり返った。そこで、H 師長が「いいけど、これを使う時間はない」と発言した。

(2) 事例② Y 師長と「新聞ワークショップ」

2016 年 7 月、初めてとなる「新聞ワークショップ」を院内で行った。この時、表現のテーマとワークショップ中の進行は研究 G が行い、参加する看護師たちとグループ分けは看護 G が決めた。10 月にも参加者を変えて、同様の役割分担で実施。その頃、研究 G は先走って「新聞ワークショップ」が自立するため道具立て(キット)を作りたいと考え、その協働の仕方を模索していた。2017 年 3 月、顔を合わせて行ったミーティングの中で、看護 G から病院内の MED メンバーを増やし、こうした活動を草の根的に広げたいとの発言があった。そして、早速に Y 師長の部署を対象にした「新聞ワークショップ」を実施することが表明された。そのミーティングの終わりに Y 師長が席を立ちながら、「キットつくっているんだよね。よろしく。」と研究 G に言った。研究 G はキットをつくりながら、看護の「実践知」を共有するための活動プログラムと道具のデザインを新たに始めた。

2017 年 6 月、Y 師長の部署のスタッフを対象とした第 1 回目の「新聞ワークショップ」が実施され、Y 師長は研究 G がつくったキットを使い運営した。行為の詳細が描かれた「新聞ワークショップの流れ」を片手にもっての進行。そこに参加した研究 G (2 名)は写真等の記録を行った。終了後、看護 G よりキットの改善要望が多く挙がった。研究 G はそれを持ち帰り、第 2 回目となる 10 月に向けて改良を行った。10 月の終了後にもまた改善要望があがったため、研究 G はその次の回に向けた改良を行うことになった。第 3 回目(2018 年 3 月)、別の部署にはなったが、やはり司会進行はキットを使い Y 師長が行った。そして、そのワークショップの最後、「私はワークショップをやる人間として、いろいろな部署に向かいしていく」と、参加者全員に向かい発言し、協力を促した。

3.4 考察

前項に挙げた 2 つの事例は、いずれも 2 年程の期間の中で想定外の出来事が連続して起きている事態である。研究 G は、そのような予想外に生成される状況とどのように関わりながら、活動プログラムと道具を改善・考察していったのだろうか？私(たち)の認識とその変化について考察する。

(1) 関係性の変化によって起きた共同デザイン

この関わり合いの中で興味深いのは、偶然に居合わせた S 氏の周動的な参加が、あの場に居合わせたそれぞれの立場の人の関係性に変化をもたらしたと解釈できる点にある。あの部屋に入ってきた時、S 氏、研究 G、看護 G、看護師たちは、上下に序列化された組織のようであったと考えられる。なぜなら、S 氏は研究 G にとって師のような存在であり、また看護師長で構成されている看護 G は看護師たちからすると上司だからである。また、研究 G と看護 G の関係は明確ではないが、看護 G は研究 G に対して、ものを言い難い状況にあったのではないかと推測する。ある種の誤解とも言えるその上下関係は、S 氏が看護師たちの

立場に立って研究 G に意義を唱えたことをきっかけに変化した。研究 G が何か正解を知っている人で、看護師たちが知らない人ではない。そのような気づきが、思いを伝える労力について教えてくれた看護師の態度や、看護 G がこの直後に「先生たちも正解を知っているわけじゃないんですね」と発言したことにもみてとれる。プロジェクトの当初、「ゴールを教えて欲しい」と訴えていた看護 G は、それ以後はそういったことは全く発言しなくなっていた。

看護 G と研究 G の関係性は、その後のデザインの展開にも変化をもたらしている。あの時、私たちは、S 氏の本質をついた発言や、その発言に触発された看護師の反応に対して、耳と傾けるという関わり方をした。そして、それを受け入れ、起こしたかった活動の本質に立ち戻るといった選択をした。心象を表現するのはいい。しかし、それを外化して共有した時に、自分たちが立ち向かうとしていた記録業務と同じような営みをつくり出してしまっていることに全員が気づくことができた。その気づきは、道具のデザインを一度立ち止まらせ、活動プログラムの再検討という新たなデザインの展開の起因としてはたらいだ。また、最後に示した H 看護師の発言も加わって、新たな活動プログラムというのは、研究 G が看護 G に協力してもらってデザインするというデザイン方法の認識は、看護 G と共に行わなければならないという認識へ変化した。

(2) 役割の移行と新たなデザインの始まり

この関わり合いの中で興味深いのは、新聞ワークショップの実施主体が研究 G から看護 G に完全に移行している起点に、2017 年 3 月のミーティングでの看護 G からの突然の表明があるという点である。おそらく、それまで研究 G の振る舞いをそばでみていた看護 G が、「その行為は自分でもできそう」と思ったこと、さらに院内に活動を広めていく道筋を見通したことによって、その状況がつくられたのだろう。当該ミーティングの内容を予め知ることにはなかった研究 G は、そこに立ち現れた看護 G の表明に耳を傾け、受け入れていった。その時点で、研究 G は自分たちが何かを計画し、それに参加してもらおうという研究 G 主体のかたちではなく、自分の意思にかかわらず「巻き込まれる」としか言いようのない状況の中にいる。

プロジェクトが始まって4年は、研究 G が表現ワークショップを運営しなければならなかったと考えていた。しかし、ここに来てはじめて、看護 G がやれるのだという気づきを得た。また、巻き込まれ、それまでの役割を手放したことは、私たちは今ここで何をすればいいのかを考え実践する契機となった。そして、そこにキットをデザインするという役割、そして、新聞ワークショップで起きた語りを継続的に起こしという新たなデザイン問題を見出している。私たちのデザインは、

新たな道具のデザインは、活動プログラムを共同でデザインするということは、現場の埋め込みと同時に行われることであるという認識を新たにもつことができた。

4. まとめ

共同デザインにおける想定外かつ驚きの出来事を中心に省察することから得た気づきは、その成り立ちを下記のように特徴づける。すなわち、1) 周動的参加の状況をつくりだし、関わる人たちの関係性の変化を起こす。2) 目的を固定化せず、目的がないことにも耐えながら、発見的に前進する。3) 巻き込まれることによって、自分の意思に関わらず、その状況の中にいることを選ぶ。このような行き当たりばったりに見えるデザインの思考と行為について、ティム・インゴルドは「応答」という概念で説明している。それは今生じていることにしたがって順々に反応すると

いうことを意味している[Ingold 2013]. また、ドナルド・ショーンは、そのプロセス全体を専門的実践家の専門性として「行為の中の省察」という概念で意味付けている[Schön 2007]. 私たちのデザインを成り立たせている上記の1)～3)の特徴は、活動プログラムのデザインがいつも不確実で不安定な状況に置かれているためであり、私たちはそれをあえて選び、状況と対話することをデザインの動力にしていると言える. 今後、こうした記述が次なるデザインの道標になるよう、まとめていきたい.

<謝辞>

本プロジェクトに参加する佐賀大学医学部附属病院看護部の皆様に感謝申し上げます. また、事例に登場する成果物のデザインには多摩美術大学の学生が参加しています. なお、本研究の一部は JSPS 科研費 15K16174 の助成を受けたものです.

参考文献

- [小早川, 2009]小早川真衣子, 敦賀雄大, 高見知里, 永井由美子, 須永剛司, ミュージアム学習のための表現活動プログラム設計の枠組み, デザイン学研究 2008 年度作品集, 14 号, pp.50-55, 日本デザイン学会, 2009 年 3 月
- [藤満 2013] 藤満幸子, 山口真由美, 原田由美子, 梶島久美子, 宮之下さとみ, 南里美貴, 百武朋美, 山田クリス孝介, 須永剛司, 小早川真衣子, 新野佑樹, 渡辺健太郎, 西村拓一: 医美工連携による看護情報システムの開発を目指したデザイン・プロジェクト, 第 33 回医療情報学連合会(第 14 回日本医療情報学会学術大会, 2013
- [宮之下 2017]宮之下さとみ, 藤満幸子, 原田由美子, 山口真由美, 梶島久美子, 山田クリス孝介, 須永剛司, 小早川真衣子, 丸山素直, 看護体験を表現する作文・新聞ワークショップの検証, 日本デザイン学会 第 64 回春季研究発表大会, 日本デザイン学会, 2017 年
- [渡辺 2015] 渡辺健太郎, 藤満幸子, 原田由美子, 山田クリス孝介, 須永剛司, 小早川真衣子, 新野佑樹, 阪本雄一郎, 西村拓一, 本村陽一: 看護現場における業務経験の表現・共有支援システムの開発, 情報処理学会論文誌, 56(1), 137-147, 2015
- [須永 2013] 須永剛司, 小早川真衣子, 山田クリス孝介, 渡辺健太郎, 新野佑樹, 西村拓一: Co-design プロジェクトが自発的に回ること: 社会を形づくるデザインに向けて, 人工知能学会誌, 28(6) 886-892, 2013
- [Ingold 2013]ティム・インゴルド, 金子遊訳: メイキング 人類学・考古学・芸術・建築, 2017, 左右社 (Tim Ingold: Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture, Routledge, 2013)
- [Schön 2007] Donald A. Schön 著, 佐藤学他訳, 2007, 「省察的実践とは何かープロフェッショナルの行為と思考」, 鳳書房